（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　　泉谷　千尋

本論文は、ドイツ中世文学の代表的なテクストのひとつであり、難解をもって知られる、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ『パルチヴァール』（13 世紀初頭）の物語構造に新たな光を当てようと試みるものである。その際、いわゆるアルトゥース･ロマーン（アーサー王物語）の基本構造と宗教性の問題を組み合わせる点でドイツにおける先行作品と言え、また冒頭で暗に言及されていると解釈し得る、ハルトマン・フォン・アウエの『グレゴーリウス』との比較対照が、手がかりとして用いられている。

アルトゥース･ロマーンの基本構造とは、ここで問題になる限りでは、主人公が冒険に赴き成功を収めて帰還した後、一旦達した誉れの高みから恥辱へと転落し、第 2 の冒険行を経て新たな、より高い誉れに到達するとともに、最初の冒険行では隠されていた主人公と騎士社会の問題性も表面化と解決へと導かれる、というものである。『グレゴーリウス』において本論文が注目するのは、恥辱が母子相姦の認識に、第 2 の冒険行が超人的な自己滅却に置き換えられていることとともに、なかんずく、兄妹相姦の子である主人公と、その妻ともなった母との間の、罪過および贖罪の相似と対照であり、そこに主人公の「巨人性」・代表性と、副主人公である女性の受動性を見る解釈は、説得力を持つ。

これを背景にした『パルチヴァール』の分析は、とりわけ第 2 の冒険行にあたる部分の構造と内実に光を当て、全編の主題もそこから解釈する。物語中この部分は、その大半で主人公パルチヴァールは時折言及されるに留まり、むしろ副主人公ガーヴァーンが中心となるという特徴をもつが、本論文の第一の大きなテーゼは、この構成の中、主人公には本質的な成長が与えられず、むしろガーヴァーン物語で、誉れと愛を求める騎士達の営為が暴力・死・悲嘆の連鎖となる、という騎士社会の病理が主題化され癒されるのであって、それがパルチヴァールの課題である聖杯王アンフォルタス救済･聖杯王就位の前提を成す、つまり主人公が騎士社会を代表する形で抱える問題性の、内実と解決の方向をも示す、ということである。さらに、この「治癒」が、騎士社会の犠牲者としての女性を代表する一人であると同時にその病理をも極端に体現するオルゲルーゼの「治癒」を決定的なステップとする一方、それが様々な敵対関係の宥和へと広がる過程が、多くの女性の力によるものであり、その意味で、女性が第 3 の主人公として、騎士社会の病理に苦しみながらそこからの救済に能動的な役割をも果たしている、という主張が、第二の大きなテーゼを成す。

本論文は、新たな視点からの解釈を追求する一方、関連する他の重要な主題の突っ込んだ検討はせずに終わっている点もあり、更なる展開が望まれる部分も見られるが、物語構造に関する新たなテーゼに基づく入念な作品解釈は、十分に評価すべきものである。以上に鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。